

上部消化管内視鏡検査の苦痛に関する実態調査

中央内視鏡部

○奥田和代 塚本美保
宋友榮 近藤さつき
米澤友子

はじめに

内視鏡技術の進歩や性能の向上は目覚しく、今日では上部消化管内視鏡（以後、胃カメラ）は、ごく一般的な検査となっているが、被検者は緊張し、苦痛を訴えることが多い。平安山ら¹⁾や前田ら²⁾によると、看護師による声かけや検査中のタッチング（背中・肩をさする、手を握るなど）は有効であると述べている。当内視鏡部でも、日々患者の苦痛の緩和に努めてきたが、被検者が感じる苦痛を明らかにし、苦痛緩和を図るために、苦痛の強い時期、苦痛の内容、現在の緩和方法で緩和できているかについて調査した。また、当院では鎮静剤や鎮痛剤の使用を（一部の例外を除いて）基本的に行っていないが、緩和の方法として患者がこれらの薬剤の使用をどの程度望んでいるかを調査した。

研究方法

（方法）質問紙調査

（対象）当院上部内視鏡検査の被検者に検査後、調査の趣旨を説明し同意を得られた225名。男136名。女89名。

平均年齢61.2歳±11.2

（研究期間）2003年8月4日

～2003年9月14日

（質問内容）

① 年齢

- ② 性別
- ③ 検査回数
- ④ 胃カメラの苦痛についての感想（単項選択）
- ⑤ 検査前に苦痛に感じたこと（多項選択）
- ⑥ 検査前処置で苦痛に感じたこと（多項選択）
- ⑦ 検査中に苦痛に感じたこと（多項選択）
- ⑧ 検査後に苦痛に感じたこと（多項選択）
- ⑨ 検査前から検査後までの各時期でもっともつらい時期（単項選択）
- ⑩ 検査前・中の看護師の声かけで不安や緊張は和らいだかどうか（単項選択）
- ⑪ 検査中のタッチングは有効だったかどうか
- ⑫ 鎮静剤・鎮痛剤の使用希望について（単項選択）
- ⑬ 胃カメラで苦痛を少なくするために重要と考えるもの（多項選択）

結果

胃カメラの感想は、『今のままでよい』が49人、『もう少し楽にしてほしい』98人、『もっと楽にしてほしい』55人、『二度と受けたくない』10人だった。

自由記載には、自分のためだから苦しいが我慢する、病気だからしょうがないなどの記載があった。

胃カメラの段階別の苦痛の比較では『検査中』114人で最も多かった。次いで『検査日決定から来院まで』が22人、『待ち時間』17人、『前処置』14人だった。

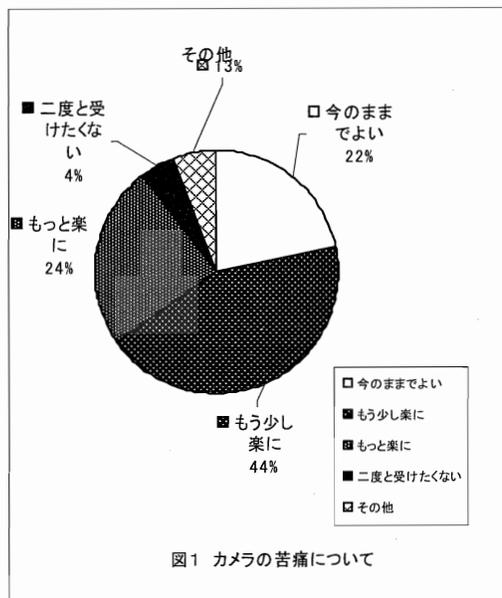


図1 カメラの苦痛について

検査中の苦痛では、特に苦痛を感じない人は29人(13%)で、『咽頭不快』69人『嘔

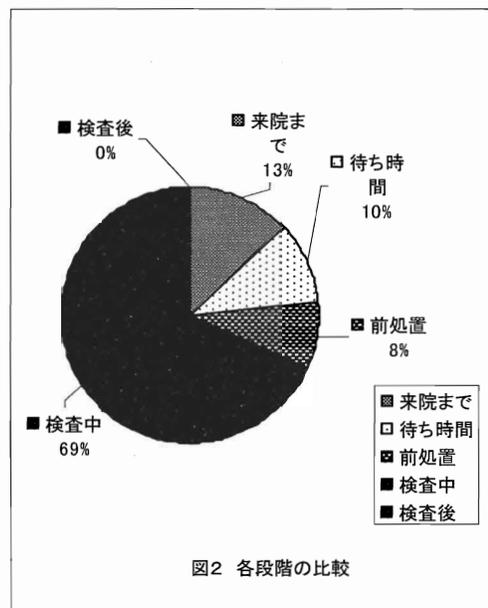


図2 各段階の比較

気』64人、『胃の中でカメラが動く違和感』33人、『腹部膨満感』26人だった。カメラのすべが悪いや、医師に対する、カメラの操作をゆっくりしてほしい・検査中に相談されていると不安になるなど具体的な指摘が8人(4%)あった。

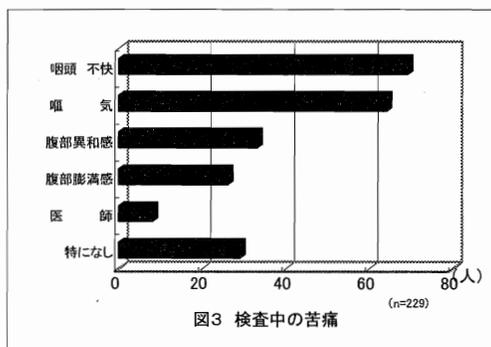


図3 検査中の苦痛

検査中以外の苦痛には、検査前では、『検査に対する不安』が、54人(24%)。『検査結果に対する不安』が38人(17%)だったが、120人(53%)が特に苦痛を感じないとした。

前処置では、108人(48%)が苦痛を特に感じないとしたが、キシロカインビスカスは65人(29%)の飲みにくさを訴え、ガスコンシロップの飲みにくさは13人(6%)、キシロカインスプレーによる咽頭麻酔は、9人(4%)、筋肉注射は6人(3%)だった。

検査中の声かけやタッチングが苦痛の緩和に役立っているかどうかは、声かけでは『和らいだ』185人『少し和らいだ』33人、タッチングでは『和らいだ』187人『少し和らいだ』29人だった。安心した、つらさが減った、緊張がほぐれたという感想だった。

しかし、背中のおさする位置を変えてほしいという希望や、検査の経過や、後どれくらい

で終わるかを伝えてほしいや、自分自身の緊張のとり方を教えてほしいなどがあった。

苦痛を少なくするために重要と思うものは『医師の技術』135人『カメラの性能』100人『看護師の援助』56人『鎮静剤・鎮痛剤』28人だった。

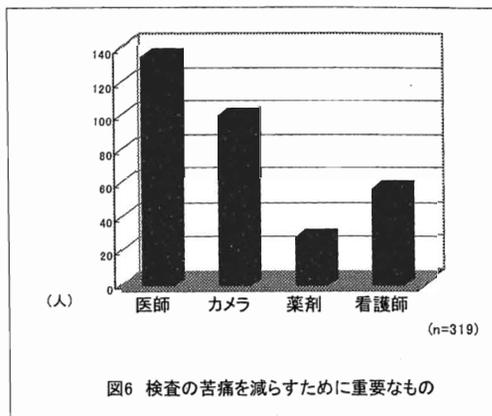


図6 検査の苦痛を減らすために重要なもの

鎮静剤・鎮痛剤の希望について『①意識をなくして知らないうちに終わってほしい』が22人、『②意識はあるが、苦痛だけを取ってほしい』が95人、『①②どちらともいえないが使用を希望する』が15人の、合わせて58.6%が鎮静剤・鎮痛剤の使用を希望しており、『希望しない』は37人の16.4%であった。『どちらともいえない』55人だった。

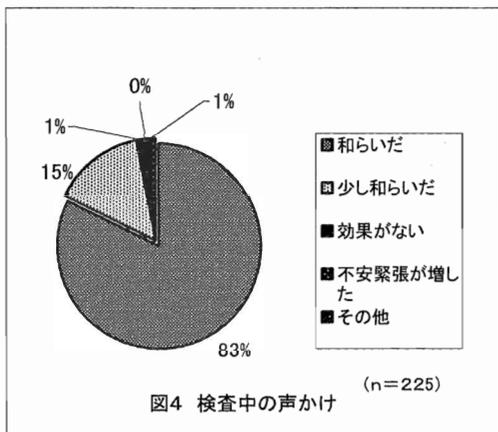


図4 検査中の声かけ

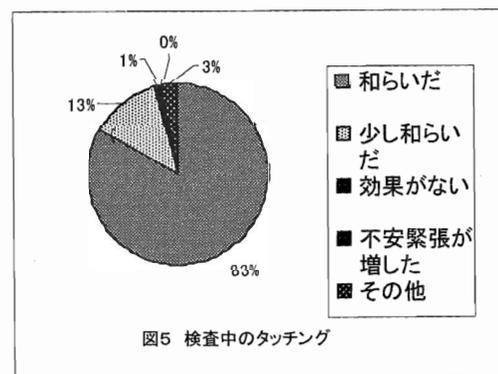


図5 検査中のタッチング

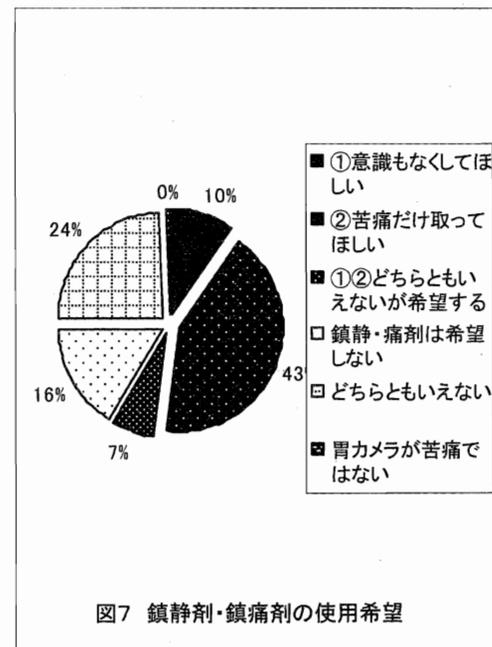


図7 鎮静剤・鎮痛剤の使用希望

考察

被検者の感想から胃カメラは苦痛を伴う検査であるといえる。

胃カメラは、悪性腫瘍や食道静脈瘤といった致死的な疾患の精査に必要な検査であり、検査結果に対する不安を強く感じると想像していたが、検査中の苦痛を訴える人が多く、検査で身体に受ける苦痛が勝っていた。

検査中に苦痛を感じる部位は、咽喉部と腹部が大半を占めた。検査前処置の苦痛では、筋肉注射を施行時に、よく痛みの訴えをきいたが、キシロカインビスカスの飲みにくさを訴える人数と筋肉注射の苦痛を訴える人数を比較するとキシロカインビスカスを苦痛と感じる人が多かった。

咽喉の苦痛が強いことやカメラのすべりが悪いという意見もあり、早急に咽喉麻酔の改善が必要である。

検査中の苦痛緩和の援助として声かけやタッチングは安心感を与え有効だが、ただ漫然と背中をさするのではなく、さする位置や強さの工夫、手を握るほうがより安心感を与えられるなどの状況判断が求められており、咽喉部や腹部の苦痛が最も少ない体位のオリエンテーションをもっと積極的に取り入れるなど、咽喉部や腹部の苦痛を緩和する方法を検討しなければならない。

また、検査中の医師の会話に不安を感じていることについては、施行医と責任者の医師が報告と確認を行っているため、その趣旨を伝えることで安心感を与えられると考えられる。さらに、胃カメラの検査は概ね一定の流れがあるため、その流れに沿って検査の進行状況、経過を伝えることで検査の苦痛を我慢しやすいと考える。

鎮静剤・鎮痛剤は、医師の技術、カメラの性能、看護師の援助と比べると苦痛を少なくする方法として重要と思う人数は、最も少ないものの、鎮静剤・鎮痛剤の使用は全体の225人中133人が希望している。医師の技術は、当院が医療機関であること、カメラの性能、看護師の援助には各々限界があるためであると考えられる。副作用の問題があるものの、今後、考慮していかなければならない課題である。

結論

質問紙調査により胃カメラは苦痛を伴う検査で、検査中の咽喉部、腹部の苦痛を緩和することが望まれている。緩和策として現在の声かけ、タッチングは有効であるという結果が出たが、苦痛を強く感じる部位への緩和策を考慮し、また、鎮痛剤・鎮静剤の使用を求める人が半数以上おり、検討が必要である。

参考文献

- 1) 平安山香代子：内視鏡検査における苦痛・不安をサポートする看護の役割、日本内視鏡技師会会報、23、36~37、1999
- 2) 前田千秋：上部消化管内視鏡検査を受ける患者に対するタッチの有効性について、日本内視鏡技師会会報、23、38~39、1999